

## 愛国勤労党南信支部組織準備会の活動と反資本主義思想

佐々木 政文

——本号所載「森本州平日記」の解題にかえて——

### はじめに

本稿は、本号に掲載された東京大学大学院日本近代政治史ゼミ「史料紹介 森本州平日記（七）」（以下、「日記」と略）の内容について若干の考察を行うものである。<sup>1</sup>

森本州平（一八八五—一九七二）は、長野県下伊那郡松尾村新井（現飯田市）の名望家であり、昭和初期には村会議員、産業組合長、在郷軍人会分会長、伊那社役員、百十七銀行・南信新聞の重役、下伊那郡国民精神作興会の専任幹事などを務めた人物である。<sup>2</sup>今回私たちが「日記」を翻刻した一九三一（昭和六）年四—六月という時期は、下伊那地方において、愛国勤労党南信支部の結成（一九三二年八月二七日）に向けた組織準備が本格的に行われた時期であった。大正後期以降同地方の国家主義運動の中心にいた森本も、当然、この組織準備に関与した。

須崎愼一氏は、下伊那地方における国家主義運動を「地域右翼・ファッショ運動」<sup>3</sup>と呼び、下伊那郡国民精神作興会（一九二四年一〇月設立）・猶興社（一九三〇年一二月設立）・愛国勤労党南信支部（一九三一年八月設立）という一連の運動の発達過程を詳しく検討した。また、須崎氏は、愛国勤労党南信支部の組織準備過程を通して、森本が地域の青年層から次第に「疎外」され、運動の中心から後退していったことを指摘した。その理由として、須崎氏は、地域の青年層が「反資本主義」的傾向を強め、「ブルジョア」であった森本を支持しなくなったことを挙げている。<sup>4</sup>筆者もこの指摘に基本的には同意する。

しかし、須崎氏の研究には不十分な点がある。それは、愛国勤労党の特徴が単に「ファッショ政党」と説明され、同党の反資本主義的主張についても、「客観的には、ファシズム特有のデマゴギー」というしかない<sup>5</sup>とやや一面的に評価されている点である。後述するように、同党の経済政策には、高島素之門下の国家社会主義者たちの思想が強い影響を与えており、その点において同党は共産主義運動とも相通じ

る性格をもっていた。このことを踏まえないければ、当時、左派社会運動の影響を強く受けていた下伊那地方において、なぜ愛国勤労党のような極右政党が支部を結成できたのか、また、なぜ同党から森本が排除されていたのかが、正しく説明できないように思われる。<sup>(7)</sup>  
よって、本稿では、今回翻刻した「日記」およびその関連史料を素材として、右の点について思想的な検討を行い、下伊那地方における国家主義運動発達の側面を抽出することを課題としたい。

### 一、愛国勤労党における反資本主義思想

本節では、愛国勤労党における反資本主義思想について検討する。同党は、一九三〇年二月一日に東京で結成された、「日本主義」を自称する国家主義政党である。同党では鹿子木員信が顧問を、天野辰也・中谷武世・綾川武治らが中央委員を務め、機関紙として月刊の『勤労日本』を刊行し、その会員数は一九三二年二月時点で全国に二〇三〇〇名であった。<sup>(8)</sup>

愛国勤労党の「母体」となった団体として、中谷・綾川らが一九二七年一月二三日に設立していた全日本興国同志会がある。これは、各地の国家主義団体に呼びかけて組織された反共的な思想団体で、下伊那地方の森本州平・中原謹司らもこれに参加していた。<sup>(9)</sup> その「綱領」は、次のようなものであった。

- 一、建国ノ理想ヲ恢弘シ民族無窮ノ発展力ヲ長養ス
- 二、一君万民ノ国性ヲ政治組織ニ実現ス
- 三、上下融和国民一家ノ風ヲ社会制度ニ反映ス
- 四、国民経済ノ繁栄ヲ郷村自強ノ根基ノ上ニ促進ス
- 五、有色民族ノ崛起運動ニ協力シ国際資源ノ衡平、人口移動自由

ノ原則ノ上ニ新世界秩序ヲ創建ス<sup>(10)</sup>

注目すべきは、「国民経済」の将来について述べた第四項である。ここで彼らは「郷村自強」、つまり地域社会の統合力の強化によって、「国民経済」をさらに「繁栄」させることを謳っていたのであり、資本主義経済を根本的に改革しようとする思想はここには見られない。

その一方で、愛国勤労党にはもう一つの重要な勢力が参加していた。それは、矢部周・神永文三・小栗慶太郎・津久井龍雄など、高島素之（二八八六―一九二八）門下の運動家たちである。<sup>(11)</sup> マルクス主義経済学の専門家であった高島は、プロレタリア階級による反資本主義運動を肯定すると同時に、国家統合の中心としての天皇の存在に強く期待するということ、いわゆる国家社会主義の立場をとっていた。<sup>(12)</sup> 高島は生前に多くの運動家を育てたが、なかでも津久井は急進的な右翼運動家として知られ、一九二九年八月に右派労働運動団体である急進愛国労働者連盟を組織し、さらに、天野・綾川・中谷らと提携して新党結成を画策した。そして、彼らが全国各地を「巡歴」して関係団体の支持を集めた結果、一九三〇年二月一日に結成されたのが、他ならぬ愛国勤労党であった。<sup>(13)</sup>

これらの国家社会主義者は、日本経済の将来をどのように考えていたのだろうか。一例として、当時津久井が主張していた財産奉還論をみよう。

津久井は、天皇と、それに対する国民の心情を、「天皇の中に生きる気持、天皇を通じてのみ生きる気持、それは民主主義でもない、デモクラシーでもない、そういふ平面的な世界を遠く遙に駆け離れた世界である」として理想化する。この理想を実現するためには、個人が「私有的利己的気持」によって生きるような社会の仕組み、つまり私

有財産制は廃止されなければならない。よつて、人々が所有する一切のもの、すなわち「資本家はそれ持てる資本を、地主はその持てる土地を」放棄し、全て天皇に捧げることを、津久井は主張した<sup>(14)</sup>。これが、津久井のいう「一切を挙げて 天皇に奉還せよ<sup>(15)</sup>」というスローガンの意味であった。津久井は、天皇を、日本社会における財産公有化実現のための象徴として捉えていたのである。

このような国家社会主義思想は、愛国勤労党の運動にも強い影響を与えていた。一九三〇年二月一日、愛国勤労党結成大会において決定された同党の「綱領」は、次のようなものであった。

- 一、吾党ハ天皇ト国民大衆トノ間ニ介在スル一切ノ中間勢力ヲ排斥シ一君万民一家ノ本義ニ基キ搾取ナキ国家ノ建設ヲ期ス
- 二、吾党ハ天皇政治ヲ徹底シ個人主義ヲ基調トスル諸般ノ組織ニ根本的的改革ヲ加ヘ産業大権ノ確立ニヨリテ全産業ノ国家的統制ヲ期ス

- 三、吾党ハ農民大衆ト都市勤労生活者トノ利害ノ調和ヲ図ルト共ニ国民生活ノ農本還ヲ期ス

- 四、吾党ハ資本主義ノ傀儡タル特権政党ト国性ヲ無視セル無産政党トニ鋭ク対立シ之カ克服ヲ期ス

- 五、吾党ハ白人帝国主義ノ鉄鎖ヨリ有色民族ヲ解放シ人類平等資源衡平ノ原則上ニ新世界秩序ノ創建ヲ期ス<sup>(16)</sup>

右の五項目のうち、津久井ら国家社会主義者の思想が最も強く表れているのは、第二項における「産業大権」という主張である。党機関紙『勤労日本』によれば、「産業大権」とは、「軍の編成、運用に関する統帥権が天皇の大権に属するやうに、産業の組織、活動に関する統帥権を天皇の大権とする」ことを意味する<sup>(17)</sup>。その根拠は、「日本人の経

済活動はいよ／＼複雑となり、ます／＼<sup>(18)</sup>広汎となり、もはや部分的、自浄的な統制作用では間に合はなくなつた<sup>(19)</sup>」、つまり市場経済による自動的調整が十分に作用しなくなったことにある。統制経済の実現には強い力が必要だが、現実の社会には「国家の力以上の強い力がないのだから、これに據らなければ経済組織の樹て直しも出来ない<sup>(19)</sup>」。統制の中心は必ずしも天皇である必要はないように思えるが、日本では「すべての重要な社会統制作用は、天皇に帰一しなければなら」ず、そのことこそが「天皇中心の我が国体の優位的な特徴」である<sup>(20)</sup>。したがって、統制経済の権限を天皇に与えることにより、「現在のやうな無政府的な、個人的営利競争の経済を計画的な、国民全体のための経済に改めることが出来る」という<sup>(21)</sup>。このように、同党は、津久井らの主張を踏まえ、天皇を統制経済の中心に据えて資本主義経済を改革することを主張していた。

こうした主張は、従来、全日本興国同志会が掲げていた資本主義肯定の主張とは明らかに異なるものであった。しかし、綾川が国家社会主義者の関与に不快感を覚え、実際には愛国勤労党の運動にほとんど参加しなかったの<sup>(22)</sup>に対し、中谷は国家社会主義者の主張に共感的であった。中谷は、後述する愛国勤労党南信支部組織準備会の大会（一九三二年四月二九日）でも、党幹部として「産業大権」の構想について説明するなどして<sup>(23)</sup>おり、津久井らの主張を多少なりとも受け入れていたことがうかがえる。

このようなかで、中谷と津久井との意見の違いが表面化したのは、党の名称に関する問題であった。一九三〇年初頭まで、津久井らは「愛国大衆党」という名称の政党を構想していたが、結成の時になつて、鹿子木の意向によって党名が愛国勤労党に改称されてしまったの

である。<sup>(24)</sup> 当時、「大衆」という用語は高島とその門下の人々が好んで使っていたものであり、「大衆党」という名称はこれを容易に連想させるものであった。津久井はこの「大衆党」という名前にこだわり、中谷らと対立するようになった。<sup>(26)</sup>

その結果、一九三〇年八月、津久井は愛国勤労党を脱党し、急進愛国党を結成してしまう。津久井の脱退により、「当初国家主義団体の戦線統一を標榜した同党〔愛国勤労党―引用者注〕は、しだいに中谷武世、天野辰夫らの個人を中心とする団体となるにいった<sup>(27)</sup>」。しかし、その後も愛国勤労党は「一切を〔あ〕げて速やかに天皇へ!! 天皇のもと万民平等、かくてこそ一君万民一家の我が国政治への活路が開かれる!」<sup>(28)</sup> といった国家社会主義的な主張を繰り返し、徐々に党勢を拡大していった。

## 二、愛国勤労党南信支部組織準備会の活動

続いて、本節では、愛国勤労党南信支部組織準備会（以下、準備会と略）の活動について検討する。

準備会は、一九三一年四月中旬に生まれ、同月二九日飯田町内の旅館三宜亭での大会において正式に発足した、愛国勤労党南信支部の結成を目指す政治集団である。<sup>(29)</sup> 会員は総計四九名で、<sup>(30)</sup> 下伊那郡内の一七町村にわたっていた。<sup>(31)</sup> 準備会の組織は「企画部」・「教育部」・「機関紙部」・「宣伝部」・「情報部」・「会計部」の六部門からなり、各村には班がおかれ、<sup>(32)</sup> 同年八月二七日に愛国勤労党南信支部結成大会が開催されるまで約四ヶ月間にわたって活動した。

この準備会の母体となった組織が、一九三〇年一二月に設立された猶興社である。<sup>(33)</sup> 猶興社は反共主義的な思想団体として、「吾等が目今

最先の努力は日本そのものに菓喰ふ邪悪を断滅粉碎し、祖国をして祖国本然の面目に復帰せしむる」ことを謳っていた。<sup>(34)</sup> 発起者は、森本州平・中原謹司・岩崎篤・塩沢治雄・今村良夫・小林八十吉・吉野福一の七名であった。<sup>(35)</sup> 猶興社の「基本綱領」は前掲の全日本興国同志会の「綱領」に加筆・修正を加えた程度のもので、資本主義経済に対して「国民経済ノ繁栄ヲ農村自強ノ根底ニ置き、勤労尊重ノ生活ヲ振起ス」という肯定的な見方を示していた。<sup>(36)</sup>

一九三二年三月下旬になって、森本は、思想団体である猶興社を将来的に政治団体化していく必要を認識するに至る。<sup>(37)</sup> その発端となったのは、一九三二年三月二六日、中谷が森本に対して語った「初めは伊那の人氣はすさまじかりしも、近来は古陋なる保守に陥りたるものなるべし<sup>(38)</sup>」という言葉であった。愛国勤労党の下で革新的政治運動を一年以上継続してきた中谷にとってみれば、全日本興国同志会の「綱領」をそのまま援用した猶興社の態度は保守的に過ぎるものであった。<sup>(39)</sup> この中谷の言葉を受けて、森本は「彼一流の伊那を旧陋なりと罵せしむるに至れり<sup>(40)</sup>」と驚きの言葉を記しつつ、以後、政治運動の必要性を自覚するようになった。

森本はまず、愛国勤労党への関心を強めた。四月一日、猶興社は東京から中谷を招いて龍翔寺で総会を開き、「猶興社の政治的団体なるや否や、勤労党を支持するや否や、別に勤労党を作るや否やに付て種々議論」を行った。その結果、猶興社は愛国勤労党を支持する方針を決め、準備委員一〇名を選出し、森本と中原は後見役となった。ここで森本は、「今後若し政党と猶興社をなすとすも既成政党の如く選挙団体たるに止らず、社界、教育、風教、思想、経済総ての問題に付政党的に動くものなり」として、既成政党に代わる新たな政治運動

への期待を語った。<sup>(41)</sup>

しかし、事態は森本の思いも寄らぬ方向へ進んでいった。翌一二日、「指導員会」が開かれ、中谷が講演したが、森本は風邪でこれを欠席する。その終了後、森本を除くメンバーらは、「中谷を中心として猶興社及其将来に付、吉野、座光寺、岩崎等研究し、南信勤労党を作る事となし、予〔森本―引用者注〕に退引して後方勤務にせしめ、中原を立て、委員長とすとの事に決」してしまふ。<sup>(42)</sup>

さらに、一三日、中谷の宿泊する蕉梧堂に吉野・岩崎・森本・中原らが集まり、運動について協議を行った。結局、座光寺久男・今村良夫らの主張により「中原を起たしめて南信勤労党を作る事となり」、座光寺が書記長となること、準備委員会を「来るべき天長節」に開くことを決定した。そして、ここでも森本は「悪罵」を受けるなど疎外感を味わう。中谷も、森本に対して、「青年は予〔森本―引用者注〕に付てはブルジョアなる事、思想の故き事、容態の点等につき共鳴なし。然るに中原は青年の人氣を一身に集め居れば、中原を立て、君〔森本―引用者注〕は田円に帰りにて村夫子たるべし」という、厳しい「忠告」を行った。<sup>(43)</sup>

当時、中原が、立憲民政党系の代議士樋口秀雄（一八七五―一九二九）のもとでの選挙運動の経験をもち、樋口の後継者を指すまでに成長していたのに対し、<sup>(44)</sup>森本は反動主義的な思想運動の経験をもつにとどまっておろ、政治面での森本の劣勢は明らかであった。さらに、下伊那地方を代表する大地主であり、<sup>(45)</sup>百十七銀行の重役をも務める森本は、資本主義改革を標榜する愛国勤労党の運動において排除されるべき「ブルジョア」そのものであった。森本自身は、愛国勤労党南信支部を「猶興社の外廓運動として必要」なものとして捉えていたが、<sup>(46)</sup>資本

主義を肯定する猶興社とこれを否定する愛国勤労党との間には、やはり大きな溝があったのである。

しかも、反資本主義的な言辞を口にしたのは中谷だけではなく、準備会に参加していた下伊那地方の委員らも同様であった。この後、龍翔寺で開かれた勤労党準備委員会について、森本は次のような感想を残している。

資本主義を攻撃し資本家を葬るか如き論をなすもの多きを見る。大体の心持は通すれとも尚主義政策の点に於ては通せざるもの多し。<sup>(47)</sup>

準備会の委員連中の内、座光寺其他新しい連中は、また吾々の日本主義が明瞭に徹して居なかつた。社会民主主義にあるもの、国家民主主義にあるもの、共産主義にあるもの等あり、共産主義に傾けるもの等多く、予が資本主義の捨つべからざるを説明せるに對しては不満の様が見え、予をしてブルジョアの権化の如く思ひ、却て不満の眼を以て見て居た。之に對しては、単に吉野、今村等が思想的に吾々と共鳴せるのみであつた。<sup>(48)</sup>

「社会民主主義」・「国家民主主義」（国家社会主義の意か）・「共産主義」という分類は森本の主観に基づくものであるから、ここではさほど重要ではない。重要なことは、森本が挙げているこれらの思想がいずれも資本主義否定を基調としており、「資本主義の捨つべからざる」ことを説く森本の立場とは根本から対立するものであった点である。<sup>(49)</sup>愛国勤労党が反資本主義を標榜する政党である以上、森本がその指導者になり得ないことは当然のことであった。

このようなかで、二九日、三宜亭において勤労党準備大会が開かれ、正式に準備会が発足した。ここでは座光寺が議長をつとめ、「創

立趣意書、宣言、規約等を作成すべく起草委員を挙げることになり、議長使命により中原謹司氏外九名の委員に附託し、その起草結果を今村が報告、「満場一致拍手裡に可決」した。<sup>(50)</sup>以下、同大会の経過を中心に、準備会が何を目指していたのかをみてみよう。

第一に、会の前半では愛国勤労党京都支部の福島佐太郎が登場し、「少年時代から左傾革命的にあつたが、日本歴史を見て日本の歴史の外国思想に卓越せる事を発見して、翻然日本主義を奉じて愛国運動に身を委ぬに至つた」という自らの経歴を説明した。<sup>(51)</sup>京都市の労働運動家であつた福島は、一九二五年頃にアナキズム派から「日本主義運動」へと転換した結果、一九二九年以降津久井らと運動を共にするようになり、愛国勤労党・急進愛国党にも参加するに至つた、という経歴をもつ。<sup>(52)</sup>こうした経歴は、党にとって、左派社会運動の影響を受け、下伊那地方の人々に転向を促すのに都合が良かったと思われる。続いて、中谷が党の「主義綱領」について、「経済的には資本主義を止めて搾取なきものとする事」、「産業の統制大権を天皇に置く事」などと説明し、<sup>(53)</sup>反資本主義思想を明確にした。

第二に、同大会で採択された「宣言」には、愛国勤労党とは「吾等ノ生活利害ヲ最モ良心的ニ代表シ、夫レノ擁護ト伸張ノ為ニ飽クマデモ鬭争シ、同時ニ自国ノ生存権確保ノ為ニハ勇敢ナル進撃ヲ敢行シ、吾々ノ生活的生存的解放ヲ通ジ、日本民族ノ發展ト長養トヲ大策シ得ル政党」であると説明され、「ブルジョア政党ノ醜惡ニ痛憤スルモノ、既成無産党ノ欺瞞ニ絶望スルモノ、来ツテ吾等ノ陣営ニ集レ」と強調された。<sup>(54)</sup>なお、「宣言」では明確に述べられていないが、当時、党は、地主による大土地所有の制限、累進課税、最低賃金制、商工業認可制による自由競争の制限、失業者の生活保障など、労働者・農民の権利

を保護する政策を一貫して主張していた。<sup>(55)</sup>この方針を受けて、準備会も、勤労者の「生活利害」を運動の中心に据えることで、資本主義否定の色を明確にし、既成政党との差別化をはかったといえる。

第三に、準備会のトップに当たる委員長（正式には支部長）<sup>(56)</sup>には、森本の推薦によって中原が就任した。<sup>(57)</sup>また、顧問として森本と粥川進策の二人が推薦されることとなった。<sup>(59)</sup>これによって、中原は準備会内部の指導者、森本はこれを外から支える存在として、両者の位置関係は確定した。この人事は、岩崎篤が「予（森本）引用者注」を搾取して党費を出さしむるもの」と評したように、<sup>(60)</sup>森本にとって明らかに不利なものであつた。

第四に、森本が「吾々の日本主義が明瞭に徹して居ない人物の筆頭に挙げていた座光寺は、この大会で議長を務めただけでなく、執行委員・書記局役員・企画部役員をも兼任することになり、<sup>(61)</sup>中原とともに運動の中核に位置する存在となった。

以上のように、四月二十九日の大会で決定された準備会の方針は、思想面・人事面ともに、資産家である森本にとつて厳しいものであつた。一方、中原は、準備会の支部長に選ばれたことを機に、愛国勤労党の運動に集中する決意を固めていく。<sup>(62)</sup>六月三日夜には、中原は「市内大横町自宅を公開して満蒙問題を引さげ時局講演を約三時間に亘つて熱演」した。<sup>(63)</sup>さらに六日、中原は樋口秀雄の追悼会を最後として、それまで主筆をつとめていた民政党系新聞である信濃時事新聞社と「絶縁」することを決め、七日正式に辞職届を提出した。<sup>(65)</sup>また、座光寺も、七月二日に百十七銀行で開かれた準備会において自らの思想を披露するなど、運動に積極的に関与した（座光寺については後述する）。こうして、準備会の発足により、森本は名実ともに運動の中心から後退

し、代わって中原と座光寺が新たな指導者となっていくのである。

### 三、下伊那郡青年運動における反資本主義思想

以上に述べた愛国勤労党および準備会の活動は、地域の社会運動とどのような関係にあったのであろうか。本節および次節では、下伊那地方の青年運動を素材としてこの問題を検討する。

まず、同地方の青年運動の概要を確認する。一九三〇年一月末時点で、下伊那郡には四二町村に計四六の青年団があり、団員数の総計は八〇一六名であった。このうち、下伊那郡青年会（以下、郡青と略）に加盟している青年団数は二〇（四三・四％）、団員数は二八〇一名（三四・九％）であった。<sup>(66)</sup> 郡青は、一五歳から二五歳までの青年を主体とし、「研究大会」、「陸上競技大会」、「青年選挙権獲得運動」、「電灯料値下運動」などを行っていた。<sup>(67)</sup>

大正後期以降、同地方の青年層はしばしば左派的立場から社会運動を行い、官憲の注目するところとなっていた。長野県特高課によれば、県下には「左翼分子ノ支配下ニ在ル青年団」の数は一四であるが、このうち五つが下伊那郡に位置している。<sup>(68)</sup> ここで「左翼分子ノ支配下ニ在ル」という表現が何を意味するのかは明らかでない。ただし、次のような事実から、同地方の青年運動における左派社会運動の影響をうかがい知ることができる。

第一に、一九二八年一月一日から三〇年二月三十一日までの三年間に、郡内の青年団に所属する五名の青年が治安維持法違反で検挙されていることである。<sup>(69)</sup> 彼らの所属団体は鼎村、松尾村、喬木村、大鹿村の各青年団で、このうち前二者は郡青にも加盟している。<sup>(70)</sup>

第二に、青年団員のなかに、県特高課が「特別要視察人」または

「思想要注意人」と認める人物が含まれていたことである。県全体では、青年団に所属する「特別要視察人」は一二名、「思想要注意人物」は三〇名であるが、このうち下伊那郡に属する者はそれぞれ五名と七名である。<sup>(72)</sup> 県の人口分布を考えると、県特高課から警戒される運動家の下伊那郡内はかなり集中していたことがわかる。

第三に、青年団員のなかに、無産政党などの社会運動に関係する者が多数存在していたことである。郡内では、青年団員総計八〇一六名のうち、「社会民衆黨員」一五名、「労農黨員」二二名、「地方無産政黨員」四名、「全国農民組合員」一七名、「労働組合員」四五名、「プロ藝術運動団体員」一八名、合計二二一名の社会運動団体関係者が存在している。<sup>(73)</sup> こうした状況について、県特高課は「如何ニ無産政党乃至各左翼組合トノ緊密ナル連絡ノ下ニ青年団ニ対スルフラクション運動ノ行ハレツ、アルカヲ推知スルヲ得ヘシ」として、運動団体との関係性を強調している。<sup>(74)</sup>

以上のような左派社会運動と青年運動との結びつきは大正後期以降徐々に形成されたものであった。しかし、昭和恐慌期に入って農村での生活が困窮化したことを受けて、これらの運動は新たな局面を迎えていた。その変化を明確に示すのが、一九三〇―三二年頃の長野県で急速に広まった「階級青年団」という概念である。<sup>(75)</sup> 「階級青年団」とは、その名の通り「其の生活に対し利益を相同じくする者のみに依つて構成する青年会」を意味する。この概念によって、一部の農村青年たちは、地域の青年団を改革してこれを「階級闘争」の主体として位置づけなおし、恐慌下における農村生活の困窮化に対して具体的な行動を起こそうとしていた。<sup>(76)</sup>

恐慌に対する青年層の危機感が頂点に達したのが、一九三一年四月

五日、諏訪・上伊那・下伊那各郡の青年会が開催した三郡青年会研究大会である。ここでは、郡青が「未曾有の経済恐慌に直面して我々青年団は如何に在る可きか」という議題を提起し、「資本主義最後の段階たる現経済恐慌は極度に一般大衆の生活権を剥奪して居る。かゝる意味に於て我々青年団はより高度にそれら一切の諸事象を一般無産民衆の前に暴落せしめ、より善き社会建設の爲めに、あらゆる障害打破をしなければならぬ」という旨の趣旨説明を行った。<sup>(77)</sup>これについて、鼎村青年会の奥本卓美は、「経済的恐慌対策は国を挙げてやつてゐるが一朝一旦には解決出来ない問題だ、殊に養蚕で食つてゐる南信地方は糸価暴落により非常な打撃を被つてゐる、それは吾々の力によつてせねばならぬ、それには対外的対内的に大いに活動し青年の意識水準を高めねばならぬ」と論じ、青年自らの手で恐慌対策を行う必要性を強調した。このように、一九三一年前半時点で、郡青は恐慌への危機感から資本主義否定の意識を強めていた。

右のような青年層の切迫した意識に対して、森本らの国家主義運動はどのように向き合ったのだろうか。よく知られるように、森本による一連の国家主義運動は、左派社会運動の影響が地域の青年層に拡大しつつあることへの危機感を出発点としていた。<sup>(79)</sup>しかし、前述のように森本は一貫して資本主義肯定の立場にたっており、恐慌対策についても明確な案を出すには至っていなかった。<sup>(80)</sup>

この点について、左派社会運動の側からの重要な証言がある。当時、労農党の運動に関わっていた鼎村の羽生三七は、在郷軍人会の運動についての質問に次のように答えている。

たとえば昭和期にはいつて生糸暴落で不況になった時に、喬木村の富田という地区で農民大会を開くと、火事に使う半鐘をたたいて

て農民を集め、何百人と集まるわけです。そこに私が呼ばれていつて演説をぶち、貧農救済のために政府にこういう要求をしようじゃないかといつて決議をしたものですが、在郷軍会はそういうことが悪いと批判をするだけで、在郷軍会にしても国民精神作興会にしても、思想を批判するだけで、具体的な行動というのは、今申しあげたとおり親父を通じて息子を圧迫する以外にはないのです。ですから大衆的な意味の争点というのはなかつたわけです。<sup>(81)</sup>

当時、農村の人々が左派社会運動を受け入れた背景に、彼ら自身の具体的な生活要求があつたことは事実である。これに対して、森本の主催する下伊那郡国民精神作興会の国家主義運動が抽象的な思想批判に終始していたのだとすると、羽生がいうように、両運動の間に「大衆的な意味の争点」は生じえない。つまり、森本は、農村の人々を納得させるに足る具体的提案を出すことができなかったのである。

一方、愛国勤労党の場合はどうであつたか。森本とは異なり、党は農村経済の将来について一つの対案を提起した。党の主張を総合すれば、現実の社会において農村を「搾取」しているものは、大きくいつて二つある。その一つは「金融資本」であり、「他の産業に比較して著しく利益が少く、資本の回収に長期間を要する農業は、常に金融難に悩まされてゐる。従つて、農村に対しては、従来特殊の金融保護政策を加ふべきだつたのだ」。<sup>(83)</sup>もう一つは、「労働者資本家ひつくるめての、都会人による農村人の搾取」であり、「日本国がよし社会主義国家となるの日はあつても、都（市）労働者による農村勤労者の搾取は止むこと（が）ないであらう」。<sup>(84)</sup>これらの「搾取」に対して、「ブルジョア政党的農村救済」によつて「応急的」に対処してもさほど意味は



ない。<sup>(85)</sup>

では、農村生活の困窮化を解決する正しい方法とは何か。党はそれを、「根本的に言へば、農村の窮迫を救ひ得るものは、産業大権の確立以外にない。産業大権を確立し、一切の生産及び金融上の私的独占を排除する時にこそ、農村は根本的に救はれ得る」と、天皇の下での統制経済に求めた。党によれば、会津地方の「或る部落」は、「寧ろ此の苛斂誅求に苦しまんよりは一切の土地を天皇に奉還し、陛下直属の小作人として上納米を捧ぐるに如かずとの決意まで明瞭にし」ており、「極度なる生活の窮乏の結果、大君の鴻徳にすぎり奉らんとせる赤子の忠良なる信念は正しい」<sup>(87)</sup>。このように、党は、農村再生との関連性を強調することで国家社会主義思想を正当化し、党勢を農村へと広めようとしたのである。

共産主義も国家社会主義も、資本主義の克服のために統制経済が必要だと考える点では、思想的に共通性をもっている。とすると、両者にとって最大の「争点」は、統制経済の頂点にコミンテルンと天皇のどちらを戴くのか、という点になる。逆に、この点においてさえ妥協を行えば、極左と極右は基本的に交換可能なのである。<sup>(88)</sup>一九三一年七月一日、飯田町百十七銀行ビルで開かれた愛国勤労党南信支部組織準備会第一回宣伝演説会において座光寺が述べたといわれる「日本の改造は赤旗ではなく錦旗によるべし」<sup>(89)</sup>という言葉は、そのような意味での左右思想の交換可能性を端的に示している。党は、下伊那地方における準備会の誕生を、「信州は農村青年運動の尖端を行くところ、わけても下伊那郡は農村赤化の急鋒といはれたところだ。此の地に我が愛国勤労党の優勢なる陣営が築き上げられたことは、我が国社会運動の最近の動向が何処を指しつつあるかを有力に物語るものでなくて

何であるか」と評したが、<sup>(90)</sup>共産主義勢力の強い地域において国家社会主義勢力が登場することは、思想的には何ら不思議ではなかった。

#### 四、青年層の結集核としての座光寺久男

以上のような思想状況を象徴的に示すのが、座光寺久男（一九〇七—七八）の運動である。座光寺は上飯田村（一九二九年より上飯田町）出身の青年運動家であり、<sup>(91)</sup>三・一五事件および四・一六事件で解体した郡青を再建した実績をもち、一九三〇年度には郡青委員長を務めるなど、地域の青年運動の中心に位置する存在であった。<sup>(92)</sup>また、座光寺は郡青だけでなく猶興社にも所属し、<sup>(93)</sup>県特高課からは「比較的穏健中正ナル」人物という評価を受けていた。<sup>(94)</sup>以下、中谷の回想を中心として、座光寺が愛国勤労党に関わるようになった経緯をみてみよう。

日時ははっきりしないが、昭和初期、中谷は森本宅に三日間ほど泊まり込み、「そこへ飯田附近の町村の所謂進歩的思想に傾いていると見られるめばしい青年達を約十名位呼んで貰って」話し合った。このとき、中谷は「彼等に共通なことは、一様に既成政党に嫌らず資本家や地主の横暴が許せない、という現状打破と社会的変革を求めている」ことを知り、「私はこれなら彼等の思想的転換は大して六ヶ敷いことではない、充分話し込めばわかる、という自信を得た」<sup>(95)</sup>。中谷は、左派思想に共感する青年層のなかに「日本主義」への転向の可能性を見出し、これに期待したのである。

しかし、左派思想に共感している人々を転向させるには、当然のことながら具体的な働きかけが不可欠であった。また、党は、「果敢なる闘争の為に、不拔なる組織確立の為に、先づ、党は党の最尖端に起つて勇敢に闘ふところの青年分子を結集して、青年部の確立を計

らなければならぬ<sup>(96)</sup>」と訴えていた。下伊那地方にも、青年層の結集核となる人物が必要であった。

このようななかで中谷が注目したのが座光寺であった。中谷は、「森本や中原謹司と相談して此の地方で最も青年達の信望を集めて居る、即ち左翼寄りとか中間とか右翼寄りとかを問わず青年達が一様に信頼しておる人物は誰かと尋ねると、それは郡青委員長座光寺久男であると二人は答えた」。そこで中谷は座光寺と二人で話し合ったところ、「座光寺も他の青年達と同じ様にいわゆる進歩的思想関係の書物や雑誌、マルクス主義関係の文献等を相当読んで居た。同時に彼は日本や東洋の古典にも関心を持っており、且つ私共が猶存社、行地社の運動を通じてアジア解放運動を進めておる事実も知っており、そういう関係の書物も読んで居た」。これによって座光寺は中谷の思想や運動に深い関心をもったので、中谷は、「中原や森本に話して国民精神作興会や在郷軍人会とは別に、下伊那に新日本建設を志向する新しい青年達の思想集団を作って見てはどうかとすすめて見た<sup>(97)</sup>」という。ここで重要なことは、座光寺が左右両方の思想に触れており、それゆえに、青年層への勢力拡大に有益な人物だと見なされたという点である。

なお、詳細は不明だが、座光寺は準備会発足以前から国家社会主義運動に関与していた形跡がある。松本市では、一九二九年五月、国家社会主義色の強い地方政党である信州国民党が生まれ、同年一月には日本国民党という全国政党に発展していた<sup>(98)</sup>。一九三一年四月二六日、日本国民党長野県地方支部は役員改選を行ったが、ここで選ばれた役員のうち、執行委員の筆頭に「座光寺久雄」の名が見える<sup>(99)</sup>。通常、運動実績のない人物がいきなり組織の役員になるとは考えられないから、

座光寺は実際にはこれ以前から同党の運動に関与していたと思われる。愛国勤労党もまた、このような座光寺の思想傾向を評価して、一九三一年四月以降、彼を準備会の中核に据えたと考えられる。

では、準備会発足後、座光寺はどのような態度をもって愛国勤労党の運動に関わったのか。七月二日、百十七銀行で開催された南信支部発会式第二回準備会において、座光寺は、現在日本は「各方面に於て全く行き詰ま」つているとし、「此の行きつまり」を「打開するには、赤旗による革命と錦旗を奉じて革命との二途あり、党同志は身を捧げて錦旗革命を断行せんとするものである<sup>(100)</sup>」とした。これは前述のように、左右思想の交換可能性を念頭においた主張である。さらに、「吾々は現在の社会的諸状勢並に過去に於ける社会主義的諸運動を通じて考へるとき、結局日本に於ては社会主義が日本的なるものに修正されなくては発展の可能性が少ないこと、尚そうならなくてはならぬことを考へてゐた。愛国勤労党は正しくこの吾々の考へと合致する<sup>(101)</sup>」と強調した。つまり、座光寺は、社会運動を左派から右派へと転向させることを重視しつつ、それを実現しうる組織としての愛国勤労党に強く期待したのである。

座光寺という革新的な青年運動家を核として、地域の青年層を左派から右派へと誘導していくこと、これが一九三一年の下伊那地方において愛国勤労党が採用した運動戦術であった。そして八月二七日、飯田劇場において愛国勤労党南信支部結成大会が開かれ、支部は正式に発足することとなる<sup>(102)</sup>。

## おわりに

以上の検討を踏まえて、最後に、愛国勤労党の運動の特徴を次の二点に要約したい。

第一に、愛国勤労党が主張した「産業大権」という構想のなかには、財産公有化や統制経済を志向するマルクス主義の思想が隠されていたことである。この思想は、マルクス主義経済学者高島素之をその源流とし、右翼運動家津久井龍雄らによって党の「綱領」に影響を与え、津久井脱党後は中谷武世によって継承された。森本州平は、愛国勤労党を「日本主義」の政党と信じてこれに接近しようとしたが、そこには、森本が最も忌み嫌う思想であるマルクス主義が形を変えて潜んでいたのである。一九三一年四月に森本が感じた疎外感は、右のような思想状況から生じた当然の帰結といえる。

第二に、愛国勤労党は、左派社会運動との関係を強く意識していたことである。それは、反資本主義を標榜する党の運動にとって、マルクス主義を好む地域の青年層こそが一つの重要な支持基盤となりうるからであった。下伊那地方において、青年運動家座光寺久男が準備会の中核に位置づけられ、国家社会主義的な主張を行ったことは、左派から右派への転向指導という党の政策が実践されたことを意味する。国家社会主義は、左右思想の交換可能性を戦略的に利用することで勢力を拡大した運動だったのである。

## 註

(1) なお、本来、本稿は「日記」上の論点に満遍なく触れ、史料紹

介の末尾に解題として付される予定であったが、筆者の能力の限界から論点を経済思想に限定し、独立した論稿として執筆させていただいた。

(2) 須崎愼一「史料紹介―森本州平日記(抄)―」(神戸大学教養部紀要「論集」第三五号、一九八五年三月、五七―五九頁)、有吉拓朗「解題」(東京大学大学院日本近代政治史ゼミ「史料紹介 森本州平日記(五)」、『東京大学日本史学研究室紀要』第一八号、二〇一四年三月、一九二―一九三頁)。

(3) 須崎愼一『日本ファシズムとその時代―天皇制・軍部・戦争・民衆―』(大月書店、一九九八年、七五頁)。

(4) 須崎前掲書、一〇九頁。

(5) 須崎前掲書、一〇八頁。

(6) 佐々木敏二「二地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合―」(藤井松一・岩井忠熊・後藤靖編『日本近代国家と民衆運動』、有斐閣、一九八〇年)は、一九二九年以降、下伊那地方が「左翼運動の拠点」から「右翼運動の拠点」へと転換した過程を通史的に捉えたものである。ただし、同論文は事実関係の叙述に力点をおいたものであり、各運動団体の思想的分析は行っていない。

(7) 本稿で用いた主な関連史料の所蔵情報は次の通りである。「森本資料」・「青年団資料」・「南信新聞」・「信濃国民新聞」(以上、飯田市立中央図書館所蔵)、『勤労日本』(早稲田大学中央図書館・法政大学大原社会問題研究所蔵)、『急進』(法政大学大原社会問題研究所蔵)。

(8) 司法省刑事局編『国家主義乃至国家社会主義団体輯覧(昭和七

年十二月調』、一九三三年（復刻版、東洋文化社、一九七六年、四頁）。

(9) 木下宏一『近代日本の国家主義エリート―綾川武治の思想と行動―』（論創社、二〇一四年、九一―九三頁）、塩沢栄三『伊那思想史（稿）』（伊那近代思想史研究会、二〇〇四年、飯田市立中央図書館所蔵、二二三頁）。

(10) 馬場義統『我国に於ける最近の国家主義乃至国家社会主義運動に就て』（司法省調査課、一九三五年、一二三頁）。

(11) 中谷武世『愛国勤労党』（下中弥三郎伝刊行会編『下中弥三郎事典』、平凡社、一九七一年、一頁）。

(12) 伊藤晃『高島素之の挑戦―天皇主義の構成要素―』（『新版 天皇制と社会主義』、インパクト出版、二〇〇二年、初出一九八五年）。

(13) 以上、愛国勤労党の結成経緯については、公安調査庁『戦前における右翼団体の状況』（上巻、一九六四年、三三五頁）。

(14) 津久井龍雄『国家社会主義問答』（政治批判社、一九三〇年、二七―三一頁）。

(15) 同前、二三頁。

(16) 『国家主義乃至国家社会主義団体輯覧（昭和七年十二月調）』（前掲、四―五頁）。

(17) 『勤労日本』第五号、一九三〇年九月八日。

(18) 同前。

(19) 『勤労日本』第六号、一九三〇年二月五日。

(20) 『勤労日本』第五号、一九三〇年九月八日。

(21) 同前。

(22) 木下前掲書（二〇―一二二頁）。

(23) 『日記』、一九三二年四月二十九日条。

(24) 中谷武世『昭和動乱期の回想―中谷武世回顧録―』（上巻、泰流社、一九八九年、二二一頁）。

(25) 神永文三は、『大衆』といふ文字は、素より古く存し、高島の発明ではないが、これを社会運動上の用語に應用して、特殊の現代的意味を与へた点が高島の独創なのである」と説明している（神永生『『大衆』主義』、『急進』創刊号、一九二九年六月、二〇頁）。

(26) 福家崇洋『戦間期日本の社会思想―「超国家」へのフロンティア―』（人文書院、二〇一〇年、二六六頁）。

(27) 『戦前における右翼団体の状況』（上巻、前掲、三三九頁）。

(28) 『勤労日本』第六号、一九三〇年二月五日。

(29) 党は、地方の有志に対して、「同志の気持ちをシツクリ合せて先づ組織準備会を作る」こと、「準備会は茶話会等の集会を度々催して党綱領政策の徹底に努め、役員は支部組織に関する大綱を決め支部発会の準備を進める」ことなどを求めていた（『勤労日本』第四号、一九三〇年七月二一日）。下伊那地方での準備会の活動も、こうした党の方針に沿ったものであった。

(30) 愛国勤労党南信支部組織準備会発、各準備委員宛の通知（『森本資料』I―一一）。

(31) 一七町村とは、大島村・市田村・上郷村・上飯田町・飯田町・伊賀良村・山本村・松尾村・竜丘村・川路村・三穂村・喬木村・上久堅村・千代村・鼎村・河野村・竜江村。愛国勤労党南信支部結成準備会発、各村準備委員宛の通知（『森本資料』I―一一）

- 〇。
- (32) 「愛国勤労党南信支部組織準備会規約」〔森本資料〕I—1—1)。
- (33) 須崎前掲書、七五頁。
- (34) 「猶興社創立宣言」〔森本資料〕M—1—1五)。
- (35) 「猶興社発会式要項」〔森本資料〕M—1—1六)。
- (36) 「猶興社基本綱領」〔森本資料〕M—1—1五)。なお、全日本興国同志会の「綱領」が、「郷村自彊」による「国民経済ノ繁栄」という因果関係を示したのに対し、猶興社のそれは、「国民経済ノ繁栄」による「農村自彊」という因果関係を示している。こうした差異は、中央団体である全日本興国同志会と地方団体である猶興社との社会的性格の違いに由来していると考えられる。
- (37) 森本は、「日記」(一九三一年三月三二日条)において、「猶興社は単なる思想団体にして政治団体にあらずと雖も、将来は政治的に動くを要」す、と述べている(東京大学大学院日本近代政治史ゼミ「史料紹介 森本州平日記(六)」、『東京大学日本史学研究所室紀要』第一七号、二〇一三年三月、二三八—二三九頁)。
- (38) 「日記」、一九三一年三月二六日条(『史料紹介 森本州平日記(六)』前掲、二三七頁)。
- (39) なお、森本・中原の二人は愛国大衆党の結党準備に「全国準備委員代表」として名を連ねていたが(『急進』二巻一号、一九三〇年二月、一六頁)、実際にはほとんど活動していない。
- (40) 「日記」、一九三一年三月二六日条(『史料紹介 森本州平日記(六)』前掲、二三七頁)。
- (41) 「日記」、一九三一年四月二一日条。
- (42) 「日記」、一九三二年四月二二日条。
- (43) 「日記」、一九三二年四月二三日条。
- (44) 田口慎一「右翼政治家」中原謹司試論—愛国勤労党から信州郷軍同志会へ—(『法政史学』第七八号、二〇一二年九月、二八—三四頁)。
- (45) 代田今朝次「農地改革考の二」(『松生』第六号、一九九二年、三七頁)。一九四六年二月の調査による。
- (46) 「日記」、一九三二年四月二四日条。
- (47) 「日記」、一九三二年四月二四日条。
- (48) 「日記」、一九三二年四月二七日条。
- (49) この点は、須崎前掲書(二〇九頁)にも簡潔に説明されている。
- (50) 「愛国勤労党南信支部組織準備会記述」、一九三二年五月二日頃〔森本資料〕I—1—1一)。
- (51) 「日記」、一九三二年四月二九日条。
- (52) 福島佐太郎『私の昭和外史』(労働教育社、一九六五年、三頁および一五頁)。なお、福島は一九〇一年頃の生まれである。
- (53) 「日記」、一九三二年四月二九日条。
- (54) 愛国勤労党南信支部組織準備会「宣言」、皇紀二八九一年四月二九日〔森本資料〕I—1—1二)。
- (55) 愛国勤労党「政策大綱」(『国家主義乃至国家社会主義団体輯覧(昭和七年十二月調)』、前掲、五一—八頁)。
- (56) 準備会「規約」では、準備会役員として支部長(二名)・書記長(二名)・執行委員(若干名)・部長(六名)・部員(若干名)・書記(若干名)を置くこととなった(『愛国勤労党南信支部組織準備会規約』、前掲)。

- (57) 「愛国勤労党南信支部組織準備会記述」(前掲)。
- (58) 準備会「規約」では、正規の役員の他に「本会に顧問を推戴することを得」と規定されていた(「愛国勤労党南信支部組織準備会規約」、前掲)。
- (59) 「愛国勤労党南信支部組織準備会記述」(前掲)。なお、粥川進策は鼎村の人で、一九二三年一月四日に設立された国家主義団体である帝国鼎義士団の中心人物であった(長野県特高課「自大正十年至昭和十五年 県下国家主義団体等県特高課調」。長野県編『長野県史』近代史料編、第八卷(三)、長野県史刊行会、一九八四年、九八〇頁)。
- (60) 「日記」、一九三一年四月三〇日条。
- (61) 『勤労日本』第一〇号、一九三二年五月一日。
- (62) 愛国勤労党南信支部結成準備会発、各村準備委員会宛の通知(一九三一年五月一日、「森本資料」I—1—10)に、「中原氏の対外的声明は種々の事情で遅れてゐますが本月中旬には決行の由」とあることから、中原は遅くとも五月中旬にはこうした決意を固めていたと思われる。
- (63) 『南信新聞』(一九三一年六月五日付)。
- (64) 内務省警保局編『新聞雑誌社特秘調査』(一九二九年。復刻版、大正出版、一九七九年、二六二頁)によると、『信濃時事』は一九一四年八月一〇日に発刊された日刊新聞で、飯田町に発行所をもち、樋口がその主幹をつとめていた。
- (65) 『南信新聞』(一九三一年六月八日付)。
- (66) 長野県特別高等警察課編『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』昭和六年三月編纂(「森本資料」B—四、一七四頁)。
- (67) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(前掲、一七五頁)。
- (68) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(前掲、一七四頁)。
- (69) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(前掲、一七七頁)。五名の内訳は、鷺見京一(一九〇七年生、鼎村青年団、懲役六年)、伊藤収一(一九〇六年生、松尾村、懲役二年執行猶予五年)、市瀬次郎(一九一〇年生、喬木村、懲役三年)、小澤勝(一九〇七年生、大鹿村、懲役二年)、東茂(一九〇七年生、大鹿村、予審終結有罪の決定あり)。
- (70) 下伊那郡青年会『会報』第二号、一九三〇年一月(「青年団資料」上郷五)。
- (71) 青年団に所属していない者も含めた県全体の「特別要視察人」は七九名、「思想要注意人」は八六名、計一六五名である。『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(二一八頁)。
- (72) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(前掲、一二〇頁)。内訳は、山本村青年団(「特要」甲号一名、喬木村青年団(「特要」甲号一名、「思注」二名)、大鹿村青年団(「特要」甲号一名、「思注」三名)、鼎村青年団(「特要」甲号一名)、千代村青年団(「思注」一名)、上久堅村青年団(「思注」一名)、会地村青年団(「特要」乙号一名)。
- (73) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(前掲、一二二頁)。
- (74) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯(青年運動)』(前掲、一一九頁)。

- (75) 一九三一年三月一四―一五日、長野県連合青年団が上伊那郡伊那町で開催した第十回研究大会では、議題の一つとして「階級青年団組織をいかにして確立すべきか」と提起され、議論の結果、「現在の青年団は支配階級の完全なる隷属下にある故に、これ等〔各青年団―引用者注〕の内に存在する意識分子をより意識づけると同時に、更に反動対立勢力を根本的に排撃して、我々青年団は自主並に階級的意識の下により以上積極的に邁進しなければならぬ」と決議された（山浦国久『長野県青年団発達史』、信濃毎日新聞社、一九三五年、一五一―一五二頁）。
- (76) 以上、「階級青年団」についての詳細は、大串隆吉「昭和の大恐慌と青年会自主化運動―下伊那郡竜丘村、千代村を中心に―」（東京都立大学人文学部『人文学報』第一五五号、一九八二年三月、三二―三七頁）による。
- (77) 千代青年会『千代青年会史』（一九三四年、一五六―一五七頁）。
- (78) 『信濃毎日新聞』、一九三一年四月六日付朝刊。
- (79) 須崎前掲書、七六―七八頁。
- (80) 恐慌に直面した森本の行動については、有吉「解題」（前掲、一九二―一九三頁）参照。
- (81) 羽生三七「下伊那青年運動史の証言」（『季刊現代史』第九号、一九七八年九月、三三六頁）。
- (82) 作興会は、左傾化した青年層を「善導」することにその運動の重点をおき、一九二七年以降、青年幹部講習会を開催していた（須崎前掲書、七八―八五頁）。
- (83) 『勤労日本』第五号、一九三〇年九月八日。
- (84) 『勤労日本』第一〇号、一九三二年五月一日。
- (85) 『勤労日本』第五号、一九三〇年九月八日。
- (86) 同前。
- (87) 『勤労日本』第六号、一九三〇年二月五日。
- (88) 一九三三年六月、獄中の共産党幹部佐野学・鍋山貞親が有名な転向声明を発表した際、「民族的統一の表現」としての皇室を戴いて「一国社会主義革命」を行うことを主張したのは、こうした思想状況の反映といつてよいだろう。高島通敏「一国社会主義者―佐野学・鍋山貞親―」（思想の科学研究会編『共同研究 転向』上巻、改訂増補版、一九七八年、一七三―一七四頁）参照。
- (89) 長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編『下伊那青年運動史―長野県下伊那郡青年団の五十年―』（国土社、一九六〇年、七八頁）。
- (90) 『勤労日本』第一〇号、一九三二年五月一日。
- (91) 座光寺の経歴については、春日公夫「座光寺久男」（赤羽篤ほか編『長野県歴史人物大事典』、郷土出版社、一九八九年、三二―八―三二九頁）。
- (92) 一九三二年四月に行われた長野県連合青年団役員改選の際にも、座光寺は副幹事長候補と噂されるほどであった（『南信新聞』、一九三二年四月一〇日付）。
- (93) 「猶興社発会式要項」（「森本資料」M―一―六）。
- (94) 『県下ニ於ケル社会運動概要第二輯（青年運動）』（前掲、五頁）。
- (95) 『昭和動乱期の回想』（上巻、前掲、一八七―一八九頁）。中谷は、この出来事の後、一九二八年に猶興社が「正式発会式」を挙げたと述べているが、前述のように猶興社が発会したのは一九三〇年二月のことである。
- (96) 『勤労日本』第五号、一九三〇年九月八日。

(97) 『昭和動乱期の回想』（上巻、前掲、一九一頁）。

(98) 信州国民党は、同時代の国家社会主義者が「同地国粋会の青年派と旧労働党系の諸君との握手の上に築かれたといふ一事が雄弁に此の党の本質と将来の光明とを示唆してゐる」と評したように、左派と右派の折衷という性格をもつ政党であつた（『急進』一卷二号、一九二九年七月、二二頁）。

(99) 『信濃国民新聞』（第三二二号、一九三二年五月一五日）。役員は、執行委員長（一名、八幡博堂）、書記長（二名、赤羽俊爾）、書記次長（二名、山本昌彦）、常任書記（四名）、常任執行委員（一六名）、執行委員（一四名）、顧問（三名）。

(100) 『勤労日本』第二二号、一九三二年七月一五日。

(101) 座光寺久男「全国同志に檄す 一切の既成勢力を乗り越えて彼方へ!!」（同前）。

(102) 『勤労日本』第一三三号、一九三二年九月一日。